

廣松渉物象化論の反障害論

『反障害原論』の隠されたサブタイトル

三村洋明

(MINURA Hiroaki 反障害研究会主宰)

はじめに

今年一月に世界書院から『反障害原論―障害問題のパラダイム転換のために』を出してもらいました。世界書院としては異色の本ですが、わたしが自らの論形成の中で多大な影響を受けた廣松さんゆかりの出版社ということで持ち込み採り上げてもらいました。

この本は、「運動のための理論を切り開く」ために出そうとしたことで、「障害者運動関係者」を主要な読者として設定しています。もうひとつ副題をつけるとしたら、「廣松物象化論の反障害論―反障害運動への援用」。これが隠されたサブタイトルです。廣松理論を自らの論の中に織り込んでいっているひと、また廣松さんの本を読んでいるひとたちとの対話を図りたいという思いもありました。

今回、『情況』でこの本を取りあげてもらえるとのこと、この対話の思いを果たし、そして批判してもらう中で、論の深化をなしていきたいと願っています。

廣松さんとの出会い

わたしは全共闘世代です。廣松さんはその世代のものは知らぬひとはいないという著名人で、講演などで姿を何度か見ていましたが、わたしは「書を捨てて街に出よう」という実践指向の事務屋をもって任じていたので、「姿をみかけた」という書き方しかできません。

そんなわたしが廣松さんの本を手にするようになったきっかけから書いてみます。

わたしの活動のエネルギーの一番は「吃音者―障害者」の立場性にありました。ですが、運動の中で「優秀な活動家」

像にとらわれ、優生思想―健全者幻想としての「障害の否定性」にとらわれていました。当時の青い芝の衝撃的活動や、全障連の運動の始まりの中で、わたしの中にも「障害者宣言」をなしたいという思いがふくらんだのですが、そのような思想性を獲得する回路もなく挫折しました。

そして、ふたたび動き出す、というより生き続けるのなら、そのことを総括することが必要でした。わたしのテーマは一貫して「障害の否定性」の否定」ということです。そのことは今回の本の中にも貫いています。

さて、出口が見つかるかどうかともわからないまま考えていたことは、「差異があるから差別が自然的なこととして起きるのだ」という論理をどうとらえるのかということでした。

まず、差異の分類をなさんとしていました。で、大きく分けて、「身体的差異」と「非身体的差異」という分類をしていたのです。で、反差別論関係の本を読んでいる中で身体論をかじり「関係性の分節としての身体」という表記にぶつかって、「身体的差異」―「非身体的差異」という区分は使えないというところに来ていました。

そのようなときに、久しぶりに大学時代の友人とばったりと出会い、学習会でもしようとの話になって、その題材としてその友人が出したのは、エコロジーに感心をもったところ、廣松さんの「生態史観と唯物史観」だったのです。

その学習会は早々に数回で終わりましたが、わたしはすぐ

に、『唯物史観の原像』を読み、そこで廣松さんの物象化論に留目しました。その物象化論ということが「身体とは関係性の分節である」ということにリンクし、しかも「差異があるから差別がある」ということを物象化として批判していく道筋をしめしてくれるのではと感じ始めました。そこから『資本論』、そしてルカーチの『歴史と階級意識』と読み進めました。『資本論』は前に岩波文庫九冊本の一冊だけ学習会の材料として使っていた、その一冊の最後、要するに一章最終節の「貨幣の物神的性格」のところを思い出して（『資本論を物象化論を視軸にして読む』の『資本論』は全巻物象化論で貫かれている」と後につながるのですが）全巻読み進めました。そして、そこから廣松さんの本との格闘が始まったのです。まず廣松さんの使うことば自体が分からない、図書館に通い辞書を脇に何冊も積んで、一頁で何回も辞書をひき、区切りの良いところまで読むでは、もう一回読み直す、そのようにして読み進めました。廣松さんは博識のひとで、しかも、幅広い基礎学習を積み重ねているひと、そもそも基礎的なところの学習はマルクス―エンゲルスくらいしかないわたしには理解しがたいこと多々、それでも、ここはそのあたりの基礎学習がないから理解できない、とりあえず読み飛ばしておこう、という形で読み飛ばし方を覚え、廣松さんの本にみちびかれるように、必要になった基礎学習もいくつかは後追いでいきました。わたしの哲学関係の学習は、まさに廣松さんの本

を読むためというようなところで進んでいきました。

廣松さんと差別の問題

さて、廣松さんの哲学を反差別論に援用しようなどという
と、廣松さんを知るひとは、「廣松さんは差別の問題ではほとんどこメントしてないよ」、「廣松物象化論の反差別論への援用」などというのは、廣松さんのミスリードじゃない」と一笑に付されるかもしれません。博識でいろんな事を対象化し本を書き、そしていろんなジャンルで対談をしていた廣松さんですが、差別の問題を主題にしてはほとんど文を書いていないし、差別の問題をテーマにした対談もほとんどしていません。

わたしが押さえているのは『差別の存在構造を考える——廣松涉さんに聞く』（差別とたたかう文化 第二期創刊二号、解放出版社、一九九一年）という雑誌の中のインタビュ記事と、『情況』（一九九二年、一〇・十一月合併号）での江原由美子さんと対談くらいです。前者は結局階級ということと身分をリンクする内容での議論の域を超えていません。

後者に関しては、廣松さんの対談は、司会役をするときも含めて、わたしの最良目もあるかもしれませんが、廣松さんが対談をリードするというような感があり、その対談の核心的提起をして終えているのですが、この江原さんとの対談は、体調の悪さもあったのかもしれませんが、何でこのよう

な対談を引き受けたのか、分かりませんでした。

そしてむしろ、差別の問題が抜け落ちているから、あのよ
うな文の書き方になったのではないかと、死の直前に朝日
新聞に掲載され話題になった「東北アジアが歴史の主役に
——欧米中心の世界観は崩壊へ——日中を軸に「東亜」の新
体制を」という論文への批判も出ています。もちろん、今日
の東アジアをめぐる情況をみると情況分析的な卓見はむしろ
感心されることですが、いろんな事情があったようですが、
少なくとも被差別の民族的立場からすると、反差別というこ
とで論を張るひとの立場ならあのような表記にはならなかつ
ただろうとまでは言い得ます。

そもそも「マルクス主義者は差別の問題を語れない」とし
て、個別反差別を闘うひとたちから「マルクス主義者」への
批判・決別が随所でなされてきました。マルクスの唯物史観
的なところが反差別の戦線で個別的に援用されつつも、「わ
たしはマルクス主義者ではない」という線を引かれてきたこ
ともあります。

それでも、マルクスの思想の中には反差別ということが根
底には貫かれ、マルクスの思想を継承し、それを自らの思想
として展開しようという廣松さんの中にも反差別ということ
は哲学的な認識論的な根底に貫かれていると思っています。
そのようなこととして廣松さんの思想、とりわけ廣松物象化
論といわれることの援用を試みています。

もうひとつ書きおきたいのは、廣松さんは論を立てるとき「障害者」も包括して論をたてています。今回の本の中でわたしが引用しているルビンの図形を用いての反転の例として盲人の白杖の話が出てきます。そして、差別、とりわけわたしが相対的差別として規定する問題に通じていく非対称性の問題が「存在と意味」の二巻の中で出てきています。

そして、実はわたしの反転ということで、一番ヒントを受けた文は、実は廣松さんの「思想」に掲載された論文―鼎談でした（廣松渉「精神の間主体的存在構造―「精神異常」の存立構制の定位のために」、木村敏、廣松渉、中川久定「自己・役割・他者」、思想一九八三年二月所収）。鼎談の中の文、ちょっと長いですが引用します。

「……「自我がない」という意識を持っている人の場合は、考えようによつては、むしろ自分の本当のあり方がわかってゐる。だから「正常」といわれている人のほうが、かえって異常だともいえるのではないか、という気がするんですが」

このあたりは（より）物象化されない世界のとらえ方としても押さえるのですが、デリダの脱構築論とリンクさせれば、脱構築する必要のない構築されない世界のとらえ方とも言ひ得るのではないかと言ひ得ます。これらのことは、まさに「反転」と言ひ得ることです。

確かに差別の個別課題というところでは多くの論攷を残し

ていないとしても、そもそもマルクス派は階級や労働力の価値という差別の問題を論じていく限り、その論の中には差別と言ひ得ることが含まれているとは言ひ得ます。

障害の異化―物象化

廣松さんの物象化という概念はそもそもマルクスから来ています。マルクスは『資本論』において、物象化ということをも、「人と人の関係を物と物との関係と取り違える」「社会的関係を自然的関係と取り違える」というような錯認として押さえました。廣松さんはそこからさらに進んで、ことばが起きるところから、認識論的に浮かび上がることを異化―物象化ということととらえ返そうとしました。

その廣松さんの異化―物象化ということをもわたしは「障害の異化―物象化」というところで援用しようとしています。

たとえば、廣松さんの四肢構造論を援用し、後に「障害」として異化する以前の（そのもの）としか言いようのないことが、「障害者」がもっている「障害」として浮かび上がることをとして押さえ得ます。障害学で言われる医学モデルとしての「障害」です。このことは長らくこの社会の常識、共同主観的に妥当なこととして当然視されてきました。マルクスの「社会的関係性を自然的な関係として取り違える」物象化が起きているとしても押さえ得ます。

今、イギリス障害学において「社会モデル」といわれてい

「障害とは社会が「障害者」と規定する人たちに作った障壁である」というパラダイム転換的な内容をもった提起がなされました。まさに「障害者が障害を持っている」という実体―属性という実体主義への批判の内容をもっています。パラダイム転換ということは近代知の確立におけるコペルニックス的転換もあったのですが、今起きているパラダイム転換ということは、近代知の実体主義を超える、関係主義ともいえる内容になっています。

後付的には「障害」として表し得る、(そのもの)としか言いようのないことが、なぜ「障害」として表れるのか、このことの分析が必要です。

そのあたりは廣松さんも援用するゲシュタルト心理学のルビンの図形を用いて説明した反転ということが、「障害者」サイドでなされてきました。たとえば、「障害者に世の光を」ということを「障害者が世の光に」という反転を示したことがあります。ただ、そのような反転は部分的であり一時的なことに陥っています。しかし、恒常的な反転の事例もあります。手話を第一言語とするろう者の世界では手話ができないことが障害となる反転として端的に示します。ルビンの図形は二義図形ですが、ここから異化ということを多義的に押さえ直すと、なぜ、「障害(実は「障害」)が障害者(これも実は「障害者」)がもっているものとして浮かび上がるのか」という問題設定ができます。近代的個我的論理の共同主観性が

形成されている中で、言いかえれば「標準的人間像」が形成されることと相即的に、それから外れるものが「障害者」と規定されていくのです。この「標準的人間像」の形成の土台は、『資本論』の中でマルクスが描いた「標準的人間労働」という概念につながっているという指摘ができます。

ところで、廣松さんは命名判断的異化はすべて価値付帯的に異化する、という規定をしています。しかし、命名判断的な異化ということ差別の問題で押さえたとき、差別の両義性なり、水平的異化ということが押さえられます。それを他の命名判断的異化「差異」と区別して「差異」としてわたしは表しています。そして、差別の根拠としての差異を「差異」として、この「差異」に「障害」ということばを当てはめて、わたしの反障害論を展開しています。このあたりが廣松理論からの展開(ひょっとしたら踏み外しかもしれませんが、わたしのオリジナリティともいえることです)。

「障害」がそれ以上のあるもの、それ以外のあるものとしての「障害」として表れる構図、そこにおける共同主観的なとらえ返し、それがわたしの廣松四肢構造論的とらえかえしになります。

さて、障害問題が一番遅れてきた反差別の課題になってしまったことがあります。それは労働力の価値を巡る差別が差別としてとらえられてこなかった、とらえられにくかったこ

とから来ています。

ここで留意しなければならないのは、廣松さん編集の『資本論を物象化論を視軸にして読む』（岩波書店、一九八六年）にある労働価値説への批判です。労働が価値を生み出すという、主流のマルクス主義者も陥っていた物象化に、初期優生思想に「社会主義者」たちもとらわれていった歴史があり、「社会主義」を自称する国が障害問題で差別的である構造がそこからきているととらえられます。労働価値説は、商品経済社会の物象化された相の中でおきることです。そのことが労働力の価値を巡る差別の極としてある障害差別の土台として機能していくのです。そのことをまず押さえておかねばなりません。

物象化論からとらえ返した障害に関する廣松共同主観性論

ひとの根源的存在構造を指摘する言葉があります。「ひとは〇〇する動物である」とか、「ひとは〇〇的存在である」という規定の仕方です。そのような規定のひとつとして「ひとは言葉を持つ動物である」という規定があります。ロシアのヴィゴツキーあたりの論にも「ひとが他の動物と区別されるのは言葉をもったということにある」という内容があります。これは「ことばがない・ことばが少ない」とされる「障害者」の存在を否定する・抑圧する内容になっていきます。

ところで廣松さんは言語モデルということを批判し、それ

以前の的な役割理論をもって対置しています。そしてむしろ言語ということ、スウィフトの『ガリバー旅行記』の言語の使用を禁止しようとした国の話を持ち出しながら、ことばを持ったが故のとらわれとか不幸なような話を書きながら、「ひとは色眼鏡を通してしか世界を見れない」という反転や相対化をはかっています。

さて、もうひとつ余談的なことを書き置きますが、わたしは廣松共同主観性論との出会いの中で「ひとは共同主観的存在である」という規定をしようとしたことがあります。で、すぐにそのような建て方をすると「共同主観的なことを獲得しにくい」とされる「障害者」への抑圧性をもってしまふのではないかと考えていました。廣松さんにリンクすると、むしろ廣松さんは通時的共時的「共同主観性」をその土台もろとも解体として革命をたてていたのではないかと考えられるのです。

マルクス・エンゲルスも差別の問題をほとんど対象化できなかったと批判されていますが、マルクスが『資本論』執筆と平行して「古代社会ノート」など作っている内容を見ると、そこには差別的な事柄を生み出す思想的な背景とされる進歩史観への（自己）批判的内容も含まれています。廣松さんも個別差別の問題をほとんど対象化していませんが、その論の中に原基的な反差別の思想があるのだと思っています。

障害（概念）のパラダイム転換

さて、廣松さんは「哲学の意義はパラダイム転換ということにある」と書いています。

トーマス・クーンがコペルニクスの地動説が中世的世界観から近代的 세계観への考え方の枠組みそのものの転換の内容をもっていたというところで、その考え方の枠組みをパラダイムという言葉で表し、パラダイム転換をとりあげています。そして、今、廣松さんはすべての学においてパラダイム転換がおきているという指摘もしています。それは近代知の地平—世界観の転換です。

その転換を次のように展開しています。

それは、認識論的な射影においては従前の「主観—客観」図式に代えて四肢構造の範式となつて現われ、存在論的な射影においては、対象界における「実体の第一次性」の了解に代えて「関係の第一次性」の対自化となつて現われる。（これは論理の次元というならば、同一性を原基的とみる想定に対して差異性を根源的範疇に据えることを意味し、また要素的複合型に対して函数的聯関型の構制を立てる存在観となり、因果論の説明原理に対して相作論的記述原理を立てる所以となる。……（略）……（略）……）

そこにおいては、いわゆる存在論的・認識論的・論理学的諸契機が統一態をなしている。（廣松渉「事的世界観へ

の前哨—物象化論の認識論的『存在論的位相』、「序文」ii、勁草書房、一九七五年）

その転換は障害学においても起きています。

前述しましたが、マルクスの影響を受けたといわれるイギリス障害学が「障害とは社会が「障害者」と規定する人たちに作つた障壁である」という提起を突き出しました。それは従来の「障害は障害者がもっているもの」という医学・生物学モデルから「社会モデル」への転換の提起でした。

ですが、ニュートン力学から量子力学へのパラダイム転換の過渡的なところにアインシュタインの相対性理論があると指摘されているように、障害学もパラダイム転換をなしとげていず、さまざまな批判にさらされています。「社会モデル」はまさに過渡的なこととしてあると押さえます。そこに認識論的な掘り下げが必要です。そこでポスト構造主義の障害概念の脱構築も出てくると思いますが、わたしはマルクスの「物象化概念をさらに展開する廣松物象化論の援用から、パラダイム転換を図ります。それは「障害者」という「個」という実体が「障害」という属性を持っているという実体—属性という近代知の実体主義を批判し、関係の第一次性に根ざした「障害の関係モデル」とでも表せることへの転換です。

マルクス唯物史観の障害問題への援用

マルクスの唯物史観ほど、曲解されてきたことはなく、む

しろ、タダモノ論的な観点が主流派として流布し、そこへの反発も広く流布しています。ですから、唯物史観の生みなおしが必要になっています。わたしの論考もその一つの試みです。唯物史観のとらえ返しは、既に、いろんな反差別論に表れています。端的な例はフェミニズムの論考です。家事を労働力生産再生産過程として不払い労働としてとらえることにより、性差別の構造をとらえ返しました。そのことは、今日的には「家事労働」ということを逆にとらえ返し、むしろ労働と仕事をサブシステンスという概念から区別し、サブシステンスとしての仕事として規定していくことによって、労働—家事—個人的営為と分離されていることと自分を止揚していく、労働の廃棄と仕事化という道筋を示します。

さて、このあたりは前述した物象化論ともリンクします。

フェミニズムはsex—gender—sexualityとgender性役割という概念を持ち出すことにより、sex生物学的性と違って性役割は社会的に構築されたもの、物象化されたものということを示しました。しかし、逆に言うときsexの違い自体は歴然としてあるとしてとらえました。しかし、今日gender概念を持ち出したこと自体の弊害ということがまな板にあらがり、sexという概念自体も物象化されたもの、構築されたものではないかというところへ返しが始まっています。

そのことは障害問題でimpairment—disability—handicapというWHO（世界保健機構）のICIDH（国際障害分類）と

して突き出された障害規定でも同じような構図として表わします。impairment機能障害と区別された「社会的関係性」の中でのdisability能力障害ということで、障害の今日の「社会モデル」への道を導き出したのですが、今度は逆にimpairment自体の扱いを括弧にくるか、それ自体は歴然としてあるという医学モデルへの引きずられをもたらしたのです。

さて、そこで、問題になるのはimpairment自体も物象化されている、構築されたものというところへ返します。

そのことは、今国連—WHOでは「障害者」は米語のpersons with disabilityが使われているのですが、「社会モデル」を突き出したイギリスの英語のdisabled personsの意味のとらえ返しからも始めることができます。それを語彙に沿って訳すると「できない」とされる人々」となります。ここで、問題になるのは、どのような「できないこと」が問題になるのか、なぜその「できないこと」が浮かび上がるのかということ、と、廣松さんのいえば、なぜ異化するのかということ、そしてなぜ（ひとりで）「できること」が必要なのかという問題なのです。「できる」——「できない」ということでの唯物史観的論考にリンクするのです。

前述したように「標準的人間像」が「労働力の価値」と「身辺自立」ということを巡って形成されています。そこで、「できること——できないこと」が問題になっているよう

なのです。ここで、掘り下げるのは「なぜ、できないといけないのか」「なぜ、ひとりでできないといけないとされるのか」という問題、認識論的にいえば、そこに「能力の内自化」という問題があると押さえ得ます。

そこには資本主義の成立と相即的に生じてきた近代的個我の論理、そのバックボーンとしてある近代知の地平があります。

だからこそ、実体―属性という図式、個我―能力ということでの廣松さんの実体主義批判を軸にしたパラダイム転換を援用しようとしています。

さて、どうして能力を個我のものとしてとらえる世界観、近代知の地平がうまれてきたのでしょうか？

そのあたりのことを立岩真也さんが「私の作ったものは私のものである」という論理から分析しようとしています。

「私の作ったものは私のものである」ということが資本主義的なことの核と押さえているひとがいるようなのですが、資本主義的生産の典型例、工場労働をとらえれば、分業の進行の中で、「私の作ったもの」といえる構図はなくなっています。せいぜい「わたしたちの作ったもの」なのです。そして、何より労働者の作ったものは資本家のもので、「私の作ったものは私のもの」という図式は成り立ちません。「私の作ったものは私のものである」という私的所有を何が生み出したのか。たとえば、「私」の禾ヘンは「囲う」という意

味があるということになぞらえれば、土地所有が私有財産制の端緒である、と仮說的に考えることができます。要するに耕した土地が自分のものであるというような考え方です。ですが、そもそも農といってもいろんな農があります。たとえば稲作においては、日本の農地の土地所有の歴史においても、大規模灌漑を必要としたので、耕作地を固定化しないで回していくという手法がとられました。そもそも土地は貸し与えられたものでしかありませんでした。もう一つの例、アメリカのフロンティアの牧草地の土地所有の問題があります。ですが、そもそも先住民の狩猟経済の土地を追い出して、囲いこんだ土地でしかありませんでした。

「私が作ったものは私のものである」ということは、芸術的なことや発明のようなことにおいて、擬似的にありえるのかもしれません。ただそもそも能力とは何かということを考えたときに、過去の膨大な知識から得ることやインフラの蓄積抜きに能力なるものは存在しえるのでしょうか、過去の集積に比べて個人の能力はほんのわずかな積み重ねにすぎません。それがどうして「個人の能力」などという評価に至るのでしょうか、まったく無から作りあげるものなどありません。

おまけにおかしな事態が起きています。発明したものでないことに特許なることが設定されようとしています。ヒトゲノムを解明した会社の特許なるものが設定される動きが出て

います。そして、自然の中で生きる民が使っていた薬草なども、その成分を特許の対象にしていく、どう考えてもおかしな動きも出ています。

土地所有から私的所有の始まりがあるとしたら、水や太陽も私的所有の対象になっていくのでしょうか？

資本主義社会では、近代知の地平とでもいうべき、実体―属性という実体主義的世界観を背景として、個人主義的世界観を形成しています。ですが、前述したようにそもそも能力ということ自体膨大な知の蓄積や、インフラをもとに形成されています。そもそもひとが生きるのに太陽や水や空気や大地を必要とし、多くの「自然の恵み」の中で、その中で初めて生き得ます。何か創り出すとしても、無から作りだしているわけではありません。だから、そもそも「能力」ということは「個体」ということの中で封じ込めて、その中にあるとは言えないことで、関係性の中で初めて、総体的な中で「能力」ということがでてくることです。ですから、そもそも「能力」を「個人」がもったものとしてとらえること自体がおかしいのです。こんな話を書くとき、ひと―個の営為ということを否定するのか、ひとの主体性を否定する決定論ではないかという批判がでてくると思います。ひと、ひとりひとりの働きかけ、営為ということ否定することではありません。このあたりはこの資本主義社会を成り立たせている特許のことを考えると問題は明らかになります。現在、特許など

はどこかで、過去との切断をしているわけですが、それを全部きちんととりこんでいくと、特許を発明した個人―会社の利益ということは過去の特許に対する特許使用料で全部消えてしまいます。それはすなわち、「社会的な富」として特許を考えることになります。「特許」などということの廃止ということにつながっていきます。

かつてトーマス・ペインが『コモンセンス』において王制のおかしさを指摘しました。今、立憲君主制とは言え、そもそも王制や天皇制なるものが民主主義を自称する国において存在するのかどうしても分からないのですが、現在のには当然のこととしてされている私的所有のおかしさも同様に描かれることなのです。どうして、そのような幻想にとらわれているのかと、後にとらえられるでしょう。私有財産制―市場経済が最も合理的な社会体制のようにこの資本主義の社会では扱われているのですが、王制とか奴隸制と同じように、どうしてそんなところにとらわれていたのか、歴史の笑い種になることではないでしょうか？

協働連関の中の役割分掌

さて、マルクスの思想の継承すべきことはわたしは三つあると押さえています。物象化論と唯物史観と共産主義論です。

物象化と唯物史観についてはすでに述べました。ここで

は、反障害論から共産主義論を押さえます。共産主義はド・イデで「共産主義」というのは、僕らにとって、創出されるべき一つの状態、それに則って現実が正されるべき一つの理想ではない。僕らが共産主義と呼ぶのは、現実の状態を止揚する現実的な運動だ。この運動の諸条件は今日現存する前提から生じる」(マルクス／エンゲルス著、廣松渉編訳、小林昌人補訳『新編輯集版ドイッ・イデオロギー』、岩波文庫、二〇〇二年、七一頁)で、示されています。ただ、現実の矛盾の止揚というとき、その矛盾をどうとらえるかということで、方向性の提示があります。そのことは端的には私的所有と分業の止揚という形で示されています。私的所有については、かつて一部の国の「社会主義革命」で一度はリセットされましたが、スターリンの「労働能力の違いで賃金が違うのは当たり前だ」というような主張にも見られるところで、労働能力を巡る差別は当然視されました。これはどう考えても資本主義の論理そのものでしかないのです。そこから、当然ヒエラルヒーが生じてきます。世襲というようなことも起きてきます。

従って、「社会主義国家」と言われた国においてももうひとつの分業の問題には手をつけることはありませんでした。ところで、分業の止揚ということはどうとらえるのが問題になります。協働連関の中での役割分掌ということを否定するわけではありません。で、何が問題なのか、それは「肉体労働と精神労働の分離の否定」、とりわけ何をどうやってい

くのかというところからの議論——決定からの排除ということが問題になるのではと思います。

そのことは実は「障害者運動」のスローガンの中にも表れています。「わたしたちのことをわたしたち抜きで決めるな」ということで、ところで、もちろんこのあたりのことは一方では、「自己決定」ということへの疑念としても出されています。このことは廣松さんの四肢構造論あたりで、近代的個我の論理批判として、共同主観性の中の関係の網の目の結節点としての個我というところ方に至ります。ところで、このあたりのことで廣松さんへの「決定論に陥っている」という批判があるのですが、廣松さんは確率関数という概念をもって応答しようとしています。ただ、このあたりは、わたしの中ですっきりしていません。むしろ廣松さんの未完の書『存在と意味』の続巻に実践論が予定されていたというところで、そのあたりで展開されることだったのでしようが、廣松さんはそれを果たさないまま逝ってしまった、それは廣松さんの影響を受けた者の課題になっています。

反障害論からグローバリゼーションに対抗するユニバーサリゼーションへ——反差別論をコミュニズムの基底に織り込むために——

さて、障害問題を論じているとき、つねに問題になるのは、障害問題は絶対的排除の性格が強いがゆえに、その運動

が常に社会参加型の運動に陥っていく傾向がうまれるという事です。これについては、それはわたしが今回出した本の差別形態論の中で「相対的排除」という概念を持ち出して明らかにしました。排除型の差別、絶対的排除の性格が強い差別は差別として容易にとらえられるのですが、相対的排除の性格の強い、抑圧型の差別、「なにになすべし」という差別、障害差別においては、「障害者は健康者に近づくべく努力すべし」という型の差別は差別としてとらえにくいのですが、わたしはこれもまた差別ということだと明らかにしたのです。絶対的排除に対抗する参加型の運動が陥っていく陥穽、相対的排除にからめとられていく構図を明らかにしてきました。そして、絶対的排除に対抗する機会均等という論理が、「重度の」といわれる「障害者」を切り捨てて論理になるのみならず、相対的排除の陥穽にはまってしまう、ということを描きつけてきました（相対的差別については、非対称性の問題からもとらえられます。廣松さんが『存在と意味』第二巻で資本家と労働者の契約の非対称性を問題にしていることにもつながっています）。まさに、ユニバーサルなことを失くした「障害者運動」は死でしかないのです。

そもそも障害問題をどのような差別としてとらえるのかをはっきりさせねばなりません。わたしは、労働力の価値を巡る差別の極としてであると押さえています。ですから、労働能力を巡る区別は差別でないとする資本主義社会では障害問題

は解決不可能な差別なのです（社会民主主義的な福祉国家の幻想も起きています。これはヨーロッパ伝統の個人主義と共同体主義のせめぎあいとして現れることがそこにあります。二項対立図式をそもそも批判せねばならないのですが、資本主義社会ではあくまで個人主義をベースにしてその修正主義としての共同体主義で、そこでは福祉は結局パターナリズムにとらわれていきます。もし、共同体主義を前面に出せるとしたら、そもそも資本主義である必要はないのです）。

そのことを押さえた上で、反障害運動の方針をたてねばなりません。ところが、今、「障害者運動」は障害問題を福祉論—分配—再分配論から論じていく傾向に陥っています。すでに一九世紀にマルクスがこの社会の矛盾を分配の問題からとらえることを批判して、生産手段の私的所有の問題だと提起していたのに。

そのあたりは、そもそも資本主義社会における人権論を確立したルソーが性差別の問題をとらえられなかったことに並んで、「マルクス主義者」が労働を巡る差別の問題をとらえられなかったことからもとらえられます。もうひとつ指摘しておかねばならないのは、社会変革志向の人たちが陥ってきた差別の問題のとらえきれなさがあります。そのことはひとつには、民族差別の問題をレーニンが「階級支配の手段」と規定し、それをさらに差別一般の問題に拡張した政治主義の問題があります。マルクス主義者が差別の問題をとらえられなくなった構図は、階級がそもそも生産手段の所有からの排除

という差別の問題であり、労働力の価値を巡る差別の問題であるというところから来ているのです。

そして、マルクス『資本論』を労働が価値を生み出すという労働価値説としてとらえる曲解、『資本論』が物象化ということから読めなかったことから来ているのです。さて、このあたりはそもそも労働力というときの、前述の「能力をどうとらえるのか」という世界観からのとらえ返しが必要です。

能力主義ということを考えるとき、優生思想との関係もおさえなくてはいいけません。ダーウィン進化論の自然淘汰説ということ、そのことを受け継いだ「適者生存説」が力のあるものが生き残るというようなことを突き出したことを押さえなくてはいいけません。それこそ、マルクスの言う意味での物象化「ひととひととの関係を物と物との関係と取り違える」「社会的関係を自然的関係と取り違える」がそこにあるわけですが、生物学内部でも、必ずしもそのようなことに埋没しているわけではなく、批判も起きています。わたしはとりあえず、「障害者が障害を持っている」というようなとらえ方を、医学・生物学モデルとして批判していますが、そもそも生物学においても、個と環境の二分法を越えて（ちなみに近代知の地平を批判するデリダがやろうとしていることもこのような二分法への批判でした）、ユスキュルが環世界論を突き出していますし、生態学的展開も出ていますし、パラダイム転換的主張も生物学各分野に起きています。

世界観からするパラダイム転換の中で、すべてのことをとらえ直す必要にせまられていると考えています。

さて、「障害者運動」の中で、「障害者が生きやすい社会はみんなが生きやすい社会である」というテーゼがあります。そして、「視覚障害者」も一緒に遊べるおもちゃ作りから発したユニバーサルデザインの思想があります。

今日、新自由主義的グローバルゼーションという大きな波が世界を覆っていく構造があるのですが、それは差別の構造を拡大していくこととしてとらえられます。それに対抗する反差別の思想として、ユニバーサルデザインの思想から発した、ユニバーサリーゼーションとでもいえる大きな運動を今こそ創り出していく時ではないかと思っています。

社会変革の運動は、労働者の運動を軸にして闘われてきたのですが、そもそも労働者階級の問題が労働力の価値を巡る差別の問題として、他の差別がこの資本主義社会においては労働力の能力の価値を巡る差別に収束していく構造を押さえ得ず、個別差別へ分断されていく構図から抜け出せないでいました。今こそ差別の問題をきちんととらえ返して、そのことを一つの基軸として据える中で、反差別のユニバーサリーゼーションの大きな波を作り出していく時ではないかと思えます。そのことは、障害という概念を拡大しところで、ひとが生きていく上での障壁と抑圧ということととらえ返した反障害運動として展開されることではないかと思っています。